

令和5年 第14回ダイバーシティ推進ランチョンセミナーを終えて

2023年9月4日、7日～9日、日本植物学会第87回大会（北海道大会）がハイブリッドで開催されました。ダイバーシティ推進セミナーは「コロナ禍を経て大会の‘これから’を考える」をテーマとして8日（金）に行われました。セミナーはハイブリッド形式としました。

セミナーでははじめに寺島一郎学会会長（東京大学・名誉教授）からご挨拶をいただきました。続いて成川礼ダイバーシティ推進委員会委員長（東京都立大学理学研究科・准教授）からは、本年度のテーマを取り上げた経緯について紹介がありました。現在のダイバーシティ推進委員の中には、直近のオンライン大会やハイブリッド大会にて、大会運営委員として実務を担っていたメンバーが複数おり、コロナ禍

によってオンラインツールが半ば強制的に導入され、それを活用した大会の有り様について考えを巡らす機会が多くありました。中でも、オンラインやハイブリッドといった形式によって、これまで出張が難しかった会員層の参加が可能になるなどダイバーシティ拡大に一定の効果をもたらした一方、会場にいるからこそ生まれるネットワーク構築の機会損失や運営の負担が増加するといった側面も浮き彫りになったという共通認識を持ちました。そこで、改めて大会の今後のあり方について考える機会を持ち、議論を重ねることで、学会大会が今後より多くの方々にとって有意義なものになるきっかけとなると考えたという経緯が説明されました。

最初のオンライン大会であった名古屋大会終了後にダイバーシティ委員会として大会オンライン化に関する意識調査を実施しましたが、今回の大会前に、同様の意識調査を実施しました。どちらの調査でも参加が可能になったと回答した会員が多く、特に、今回の大会前の調査では、3年間のオンライン・ハイブリッド大会を経た多様な意見をいただきました。多様な意見を集約する機会を設けるために、講演などは行わず、これらの意識調査を基にパネルディスカッションを行うこととしました。

パネルディスカッションでは2020年名古屋大会オンライン大会実行委員長を務めた東山哲也氏（東京大学・教授）、2022年京都ハイブリッド大会実行委員を務めた高山浩司氏（京都大学・准教授）、片山なつ氏（東京大学・准教授）、平田梨佳子氏（京都大学・特定研究員）、大竹桃氏（東北大学・博士後期課程）にパネリストとしてご登壇いただきました。片山氏には子育て世代として、平田氏、大竹氏には若手としての立場から参加いただきました。司会は、ダイバーシティ推進委員であり、2021年八王子オンライン大会実行委員を務めた成川礼氏（東京都立大学・准教授）と木下温子氏（東京都立大学・助教）が担当しました。

第14回日本植物学会ダイバーシティ推進ランチョンセミナー
コロナ禍を経て大会の‘これから’を考える
-あらゆる世代に活用される大会とは？

9月8日（金）
12:30-13:30

会場：A会場
（オンライン視聴可能）
お弁当あります！

-プログラム-

1. 日本植物学会挨拶 寺島一郎（東大）
2. 本テーマを取り上げた経緯 成川礼（都立大）
3. パネルディスカッション

-パネリスト-

東山哲也 東大・教授
（2020年名古屋大会オンライン大会実行委員長）

高山浩司 京大・准教授
（2022年京都ハイブリッド大会運営委員）

片山なつ 東大・准教授

平田梨佳子 京大・特定研究員

大竹桃 東北大学・博士後期課程

-司会-

成川礼 都立大・准教授
木下温子 都立大・助教
（いずれも日本植物学会ダイバーシティ推進委員
2021年八王子オンライン大会運営委員）

大会のオンライン・ハイブリッド化はこれまで出展が難しかった会員層の参加が可能になるなどダイバーシティ拡大に一定の効果をもたらした一方、会場にいるからこそ生まれるネットワーク構築の機会損失や運営の負担が増加するといった側面も浮き彫りになってきました。また、若い世代の方にとっては、学費の負担等によって出席することもありません。そこで、改めて大会の今後のあり方について皆さんと考える機会を設けます。今回は様々な世代の方々がオンラインと併用して参加できるように、学会大会が今後より多くの方々にとって有意義なものになるきっかけになれば幸いです。

BSJ 日本植物学会

日本植物学会第87回大会に参加登録された方は、どなたでも本セミナーに自由に参加できます。



オンサイト会場の様子

多くの方にご来場いただきました

パネルディスカッションでは、1. 若い世代にはオンラインの方が気楽か？ 2. ポスト探しがコロナ前と後で何か変わったか？ 3. 平日と休日のどちらに開催した方が良いか？ 4. 持続可能な大会運営とは？ という4つのポイントについて特に議論しました。どれも正解のない難しい問いですが、事前アンケート結果を紹介しつつ、パネリストの生の声を聞くことができました。さらに、聴衆として参加されていた北海道大会ハイブリッド運営の中心を担った高林厚史氏（北海道大・助教）、次回の宇都宮大会の大会会長を務める篠村知子氏（帝京大学・教授）からも、大会運営方針などについて発言いただきました。参加者としてのニーズが属性などによって多様である一方、大会運営側にとっては会場や予算などの制約があります。全ての属性の参加者のニーズを満たすのは不可能だと思いますが、どのようなニーズがあるかをまずは把握することが大事であり、それを踏まえた上で、大会運営側が様々な制約に鑑みて開催形式を決定するのが良いと考えられます。最後に司会の成川氏が、大会参加者も学会員という意味では、学会の「中の人」であり、大会運営方針が決まったならば、その枠組みの中で大会を盛り上げる形で参画する形が好ましいという意見を述べ、パネルディスカッションを締められました。

本年度セミナーで初めて大会の参加形態をとりあげました。委員の中には、オンサイト・オンライン・ハイブリッド大会の運営実務を担った方も多く、セミナー準備にあたり、様々な意見を提供いただきました。なかでも、司会の木下氏が大会前の事前調査を実施し、パネリストとの綿密な事前打ち合わせを行うことで、充実したセミナーが構成できました。パネリストの方々にも、世代、ジェンダー、運営側・参加側としての立ち位置の多様性を考慮してお願いいたしました。皆様には打診後すぐにご快諾いただき、誠にありがとうございました。セミナー後アンケートには60の方が回答いただき、特に自由記載の感想欄に多くの意見を頂戴し、反響の大きさを感じました（アンケート結果は別リンクで紹介しています）。

学会運営委員の方々、大会委員の方々、そして寺島学会会長にも大変お世話になりました。特に、限られた予算の中でハイブリッド形式の大会を運営いただいた大会委員の方々には本当に苦労されたと思います。深く感謝申し上げます。

ダイバーシティ推進委員会委員長：成川礼